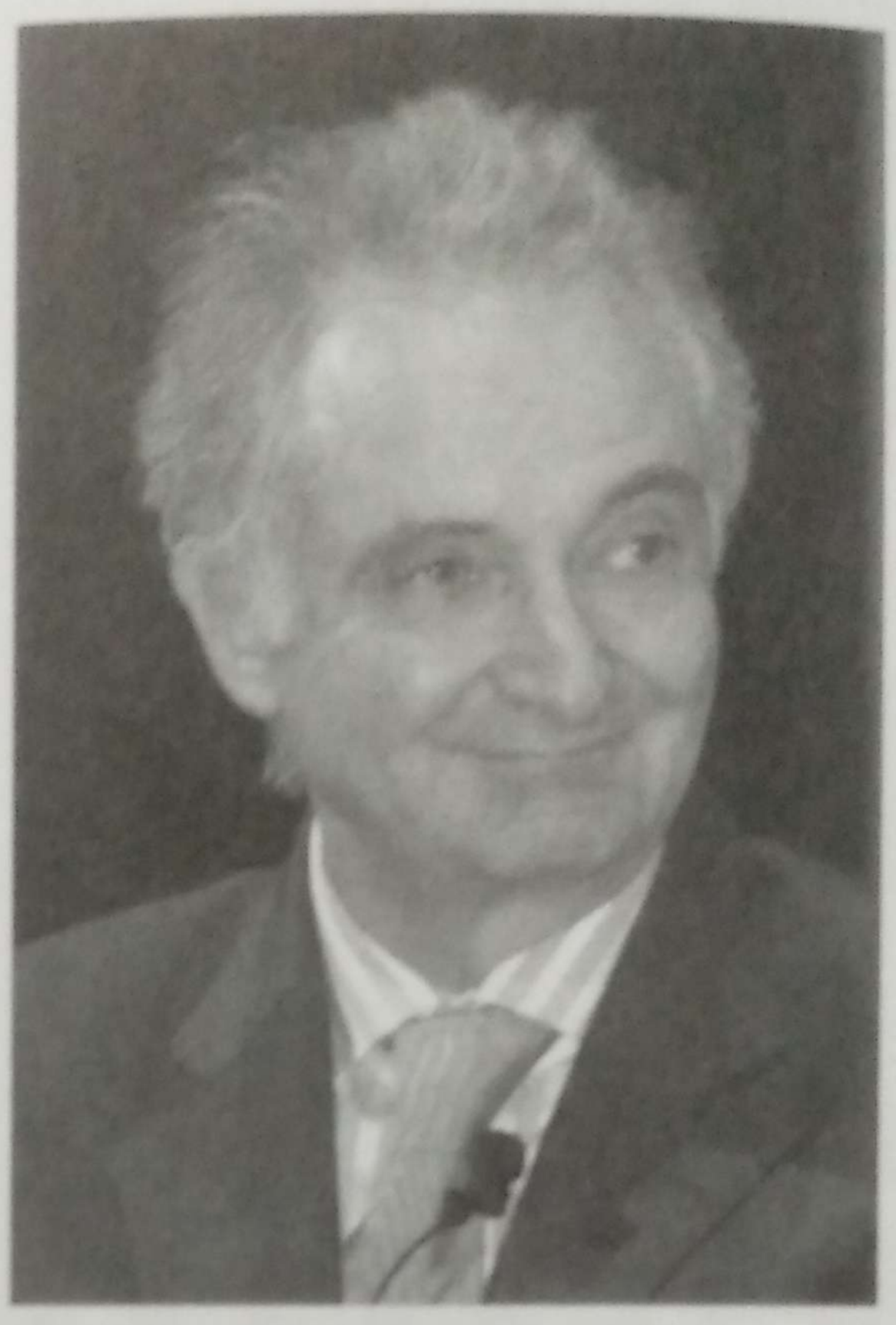
ジャック・アタリ

私は、日本人が日本人の立場で、こういう問題をもっと論じるべきだと思っています。ウクライナ問題に関しても、ウクライナの専門家とか、あるいはロシアの情報や知識だけがある人が語るということではなく、日本の立場や日本人の道徳観から、世界の情勢を語る必要があると思うのです。

そこで、今おっしゃったような、ロシアのポグロムの状況というのが、根底的にどこから出てきてどうなったのか。最終的にナチスに向かったといいつつ、スターリンの社会主義あたりか」と。そのこと一つ取っても、両方の立場を正当に考えるということ、反ユダヤ主義あるいはユダヤ擁護者ということ、そういう問題を二つに分けるべき時代ではないというのが、私の考えです。この本の目的もそうあるべきだと思っています。つまり、両方を見るということ。両方を見て、どっちが正しいかをフラットに考える……ということです。

※3 ジャック・アタリ：（1943年～）フランス人経済学者、思想家、作家、政治顧問。歴代フランス大統領のブレーンを務める。ユダヤ社会の重鎮でありグローバリズムの広告塔的存在。その著書には彼らのアジェンダが書かれているともいわれる。

自然環境というのは、やはり自然の力でしか動かせないものです。人間がそれをどうこうすることはできない。せいぜいできるのは、都市の煤煙を除去するとかですが、日本ではそれはもうほぼ成功していますからね。

茂木：自然を人間がコントロールできると考えるのは傲慢であると。

田中：「自然の素晴らしい機能や、役割というものはいったいなんなのか？」これはもちろん自然科学者たちが一生懸命究明しているわけですけれども、それは部分的で、まだまだわかっていない。ですからこれからは、その究明をするということと同時に、自然というものが信仰にまでいっていいと思います。それはなぜかというと……その存在しかないからです。本居宣長が『直毘霊（なおびのみたま）』で述べた「カミ（迦微）」ですね。人間という存在、動物や植物、自然そのものを生んだ〝自然〟というのは奇跡です。

茂木：考えれば考えるほど、考えられないくらい奇跡的ですね（笑）。

田中：ところが、そこに神を介在させ、神が人間をつくった、自然をつくったのだと、ユダヤ人が発明してしまったために、神の絶対性が出てきてしまった。ゆえに自然というものが人類にとってまだまだわからないままにある。

しかし、人間や動物やあらゆる生物をつくった自然のもの凄い力というのは「いったいなんなのか？」という尽きぬ探究心が、人間の知的な、探求心にもなると思うのです。

茂木：芸術というものは、自然なものでしょうか、人工なものでしょうか？

そして対談が進むにつれ、何かもっと大きなテーマ、「世界史の中の日本文明のあり方」とか、「日本人が世界に貢献できること」というお話に広がっていき、「ユダヤ人」がその触媒になりうるということに気づかされました。

田中：本書のテーマを一言でいってしまえば、【ユダヤ人と日本人の古代における文化交流】でしょうか。これは、もう本当に一大ドラマだと思っています。今まで日本の文化は、中国や朝鮮からきたともいわれていましたが、そういった狭い考え方の完全な否定でありますし、サミュエル・ハンチントンがいうように、日本文明は世界八大文明の一つ［※12］だということです。つまり中国や朝鮮と異なる、確固たるオリジナルの日本文化があるということに日本人は気づくべきです。ハンチントンの言説は、キリスト教文化に対しては甘いのですが、日本が一文明であるという認識は的を射ています。そして、この問題と呼応しているような気がするのです。それはなぜかというと、西欧から見て、日本の位置が太陽の昇るところにあるということにより、旅人はその間にある国々を超えて日本にやって来ているということの証になるからです。「大陸の長い距離を平気で渡ってくる人々が、古代に多くいた」という概念が、これから日本人の常識になると、これまでの「東アジアぐらいの範囲でしか文化の影響を受けてこなかった」という概念は、たちまち変わることでしょう。

茂木：世界史の見方も圧倒的に変わります。

田中：私はね、「ユダヤ」の良い面というのを評価しているのです。その役割を強調したいと思っ

ています。「ユダヤ」を否定的に、悪い面だけを強調する考え方もありますが、彼らが日本に来て、日本に協力したという意味を考えてみたい。つまり、ディアスポラのユダヤ人たちが世界に対して何をやるべきかということは、平和な場所の文化に貢献するということだろうと思うのです。伝統と文化を保つことに貢献するということも大事です。

日本という地で、そういう「ユダヤ」がいたということは、これからの世界を考える上で非常に重要な思考の礎（いしずえ）になると思います。

天皇が126代、2600年もの間続いてこられたのも、ある意味で彼ら、ユダヤ系秦氏の力があったからともいえます。そこにテロリズムはなかった。ネストリウス派の蘇我氏は例外的にテロリズムをやったわけですが、それ以後はぴったり止んだというのは、彼らが日本文化を遵守したということです。もちろん逆に考えれば、ユダヤ教徒にとってはユダヤの神を捨てたということにはなってしまうけれども、その国や土地に「同化」するということは、ユダヤ人にとっても良いことだと私はみているわけです。

そういう意味でも、この【日ユ同化論】という考え方が受け入れられれば、ある意味で世界史を変えるだろうし、また日本史も変えることになると思いますので、ますますこの研究に取

※12　世界八大文明：米国の国際政治学者、サミュエル・ハンチントンが『文明の衝突』で提唱。冷戦終結後の世界は、西欧、ヒンドゥ、儒教、日本、ラテン・アメリカ、東方正教会、イスラム、アフリカの8つの文明に分かれ、その境界線で衝突を繰り返していくと予測した。

り組んでいきたいと思っています。

茂木：この話は……資料的には確定することができない部分もあると思いますので、世の中の既存の歴史学者の多くは、都合の悪いものには蓋をするように見て見ぬ振りをするとも思うのですが……田中先生から頂いた様々な重要なご指摘は、これからの若い学者たちにとっては、〝今まで見えなかったものが見えてくる〟ものですので、研究テーマとして進展があることを願い、期待しています。

田中：今まで半ば常識としてあった〝中国・朝鮮の文化圏としての日本史観〟は、もはや捨てざるをえないでしょう。「ユダヤ人埴輪」は、多くのことを物語っています。学問的にも正しいという確信があります。これを無視したり、あるいは否定したりすることは逆に難しいのではないでしょうか。黙るということは認めるのと同じことです。学者としての良心があれば、自らの考えや常識を変えることに躊躇せず、研究を突き詰めて頂きたいですね。

茂木：特に若い歴史家、考古学者の皆さんに気づき、行動し、挑戦して頂きたいです。

田中：新たな発見や、新たなものの見方によって、歴史が変わっていくことがあるということです。マルクス主義による、あまりにも一方的で画一的な考え方とはまったく違うことが歴史にはまだまだあるのだ、ということを研究し直してくれると、本当にありがたいと思います。日本のためになります。

茂木：そして、日本全国の読者の方々が、地元の博物館とかに行ってみて、もう一回じっくり

四国の各神社の訪問をされ、各地で、東国や大和地方で起こったと考えられる神話が残されていることを見聞されています。

私は日本全体の神話は、やはり関東・東北の「日高見国＝高天原」系と、出雲・大和の「大（おお）ヤマト」系に分かれていると考えています。それは日本を「日出る国」としてやって来た縄文時代の人々と、弥生時代以降、日本に自然資源が豊かであることを知って出雲を中心にやって来た帰化人たち（大和国以来、即ち「天孫降臨」以後）、特にユダヤ人系の人々であると思われます。

各地の神社に残された神話は、「ご当地・神話」として置き換えられた、ミニ・神話だと私は説明しています。これは実をいうと、四国の阿波だけでなく、九州にも中部地方の各地にも残されていて、各地で祭祀を行う神官が身近な場所で神話を語るためにつくったものだと思われます。地元の神官が、改めて現地の地形を考えながら、神話を再現しているのです。これをつくり出しているのは、各地のユダヤ系の人々だと思われます。自分たちの知らなかった遠い東国の高天原系神話を人々に身近に感じさせるため、だと考えられます。

このことは、この本で語られなかったので、この「あとがき」で触れておきます。

最後にこの本を企画された高谷賢治氏、ワニブックス川本悟史氏に深く感謝します。